

19世紀イギリス小説の出版形式と挿絵の変容

安 藤 泉

(1) 出版形式の多様性

19世紀、もしくはヴィクトリア朝時代のイギリスにおいて小説がめざましい隆盛を誇ったことは事実である。それには、需要と供給の両方の側からいくつもの理由があったと考えられよう。娯楽のための恰好の読みものとして読者の側からの小説の需要は増大し、前世紀中葉から登場した貸本屋を通じて、庶民にとって今だ高価な小説本もごくわずかな料金で自由に手に取って読める機会が増えつつあった。(貸本屋はバースのような保養地を中心とする地方都市で始まり、やがてロンドン、ついでイギリス各地に広がっていった。) 供給の側からも、活版印刷技術の進歩は言うまでもなく、それと平行して、挿絵のためのウッドカット(木版)、エンブローヴィング(銅版が主)に加えて1798年にはリトグラフィ(石版)が発明され、出版増大の機は熟していた。また分刷本や雑誌連載といった出版形態は、読者が実際書物を自分で購入できる程度に本の値段をおさえることに成功して、購読者数を一期に伸長した。そしてもちろん **Dickens, Thackeray, Trollope** はじめ、多くの偉大な作家の続出があった。群小作家とみなされる家庭婦人たちの活躍も見落せないだろう。

出版業界全体が飛躍の時期であった。小説の隆盛と歩を合わせて、書評誌、評論誌の類も増え続け、**Carlyle** は1831年 *Edinburgh Review* の中で皮肉を込めて現代の自意識のあらわれの一つとしての書評の増殖ぶりをあげている。めまぐるしい時代の一つの証拠と言うのであった。

ともあれ、活気を極めた小説出版の動向は、出版形式自体の多様性にも表われている。以下にそれを見てみよう。

i) 3巻本：1830年頃から通例となり最も一般的に用いられた。但し、高価なために貸本屋の流行に拍車をかけた。3巻で1.5ギニの定価は貸本屋の希望もあって維持され、それに対し貸本料金は年間で1ギニ程度であった。例：Charlotte Brontë の *Jane Eyre*

ii) 2巻本：3巻本ほどに一般的ではないが “Chapman and Hall’s *Serials of Original Works*” (1843) の如き人気シリーズがこの形式を採用したので相当出回った。

例、Mrs. Gaskell の *Mary Barton*

iii) 分刷本 (part-issue) : 1836年4月から37年11月にかけて出版された Dickens の *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* 及び以後の彼の殆んどの小説、また1847年1月から48年7月まで続いた Thackeray の *Vanity Fair* 及び以後の彼の幾つかの小説は20回の各月号に分刷され (第19, 20回は同時配本が普通)、値段は1冊1シリングであった。読者に及ぼされた恩恵は大きかった。以後 Trollope, Mrs. Trollope, Ainsworth, Marryat の作品等、この形式によるものが増える。(但し20回に限らぬ分刷形式は18世紀にもいくらか見出されるし、1871年から72年にかけての G. Eliot の *Middlemarch* のように8回の不定期分冊 (1冊5s.) といった変形式も見られる)。この形式が盛んになった理由は、次に述べる雑誌連載形式と並んで、a) 読者にとっては安価であること、毎回次号を期待させられるサスペンスの妙味が味わえること、b) 出版者にとっては販売の回転の良さ、値段の融通性、広告料、貸本屋か

らの独立を可能にできること, c) 著者にとっては高い報酬を期待できること, 読者の反応を知り読者に接近できること, 等があげられよう。分刷が完結すると出版社は廉価で (1s. 6d.) 製本サービスを行い, 読者は1巻本として蔵書に加えられるようになるというおまけもついた。読者は **Serial-number** を買って後で製本サービスを受けるのを好んだが, 出版社自身も1巻本として再版することを始めるようになる。

iv) 雑誌連載 (magazine-serial): 18世紀半ばに始まったこの形式は19世紀半からは分刷本と並んで小説出版の主流となり, 分刷がすたれた後も現代にまで跡を引く。*Bentley's Miscellany* (1837-68), *Frazer's Magazine for Town and Country* (1830-82), *Good Words* (1860-1906) 等この形式の小説を掲載した雑誌は夥しいが, 特に1859年 *Macmillan's Magazine*, 60年 *Cornhill* の2誌が創刊されて以来, 1シリングの安価の魅力が手伝って爆発的人気を得た。

例 Dickens, *Oliver Twist* (1837-38)—*Bentley's Miscellany*
Thackeray, *Catherine* (1839-40)
The Luck of Barry Lyndon (1844)

以上 *Frazer's Magazine*

Trollope, *Framley Parsonage* (1861)

Thackeray, *Lovel the Widower* (1860)

Philip (1861-2)

G. Eliot, *Romola* (1863)

以上 *Cornhill*

Hughes, *Tom Brown at Oxford* (1859)

Kingsley, *Water Babies* (1863)

以上 *Macmillan's Magazine*

また以上のような月刊誌の他に1ペニーの週刊誌もあった。*Family Herald*, *Lloyd's Penny Weekly Miscellany*, *Reynold's Miscellany* 等がこれで、後に Dickens が主宰する *Household Words* (*All the Year Round* に途中から変更) も小説を連載する週刊誌であった。(*Household Words* は 2p.)

iii) iv) のような serial-publication は、内容的に見てその長所として読者の興味を維持するために冗長なページは少いことがあげられるが、逆に短所として毎回書き継いで行く際に筋やテーマの一貫性が失なわれやすいことがあった。

また読者が増大するにつれて廉価版も普及した。駅の売店で扱われるため railway novels と呼び習わされた廉価本は、40年代後半から登場し、殆んどが黄色いボール紙装丁 (yellow-back) であった。特に60年代から80年代にかけては全盛で、Sadleir の調査記録にあるだけでも40近い全集及びシリーズが廉価版で発行されている。

(2) 挿絵の役割と変容

19世紀のイギリス小説の出版形式は以上に述べた様式が専らであったが、その特色を考える際に見落すことができないのは挿絵の存在である。挿絵がすでに18世紀にも William Blake の如き偉大な詩人自らの手により、詩の言葉のイメージを補い、かつ独自の世界を表す絵に言葉が説明を加えるという相乗効果をもって書物の中に現れたことは周知の事実である。児童向きの絵本はもちろんこれ以前にもあったし、『ファウスト』、『神曲』、『失楽園』といった文学作品に鼓舞されてその中の場面を作品化する画家や版画家も登場していた。また1798年に石版技術がリトグラフ発明されたことにより、木版、銅版に加えて質・量ともに画期的な挿絵印刷の進歩が期待できるよ

うになった。挿絵の登場は、気楽な中にも多少「高尚な」娯楽を小説に見出そうとしていた当時の読者層（中産階級が圧倒的で特に女性層が増大）に小説を一層親しいものと感じさせるのに成功し、小説出版の飛躍の伸長に拍車をかけることになった。

挿絵にも流行があった。紙数の関係上、図式的過ぎるのを承知で簡単に示すと、

30—40年代：*Sketches by Boz* や *Oliver Twist* に絵をつけた **Kruikshank** や、彼と並んで *Punch* 誌に絵を寄せた **John Leech** の如く、社会を鋭く風刺したカリカチュア的な挿絵及び挿絵画家が人気を博した。

40—50年代：**Kruikshank** の鋭さ、硬さはやや敬遠され、**Seymour** 及び “**Phiz**”（本名 **Hablot K. Browne**。**Seymour** が担当した *The Pickwick Papers* の最初2回分を除き、以後 **Dickens** の作品を殆んど担当）の筆に見られるように柔かで緻密繊細な夥しい人物群が数多く描かれた。愛らしい、あるいは愉快的な、あるいは哀れなヒーロー、ヒロイン像も手伝って、庶民に親しまれた。**Thackeray** は **Kruikshank** を尊敬し、自ら挿絵を描いたが、*Pendennis* (1848—50) では章頭の装飾文字や章末の飾りカットまで工夫した。

60—80年代：絵画の世界でもそうであったように写真術のもつリアリズムの影響はこの分野でも避けられず、**Phiz** の画法は行き詰まりを見せる（**Dickens** とのコンビは完全に解消）。これに代わって新しい動きが生れた。画家自身による物語の主題解釈を大巾に盛り込んだ、つまり画家の感性を前面に打ち出した挿絵である。**Millais**, **Hunt**, **Rossetti** といった一流画家たちが挿絵の世界に乗り込んでくる。カ

リカチュアの要素は薄らぎ、物語性に富み、かつ独自の美の世界を盛り込もうとする作品が多くなる。

例 Frederic Leighton—G. Eliot, *Romola* の挿絵 (1863)

J. E. Millais—Trollope, *The Small House at Allington*
の挿絵 (1864)

挿絵と出版形式の関連は、Dickens の part-issue (毎号 2 枚ずつ Phiz の挿絵が入った) のような例を別にすれば特に決まっていたとはいなかったが、雑誌連載小説にも積極的に挿絵が採用された。これも挿絵が読者を大量に引きつける一つ的手段とされたことを証明するものであろう。

挿絵はその後も引き続いて用いられた。1891年創刊の雑誌 *The Bookman* は挿絵入りの「英国文学史」を掲載したところ爆発的人気を呼び1934年まで続いた。*Sketch, Pick-Me-Up, Strand Magazine, Pierson's Magazine* 等当時一級の文学者を配した挿絵入り文芸誌を目指す企てが相次いだ。あるいはクリスマス贈答用などとしての豪華本が人々に愛されるようにもなった。しかし、小説と挿絵の密接な結びつきは、40—50年代を頂点にやはり徐々に薄らいで行く。60—80年代の画家たちは、挿絵の精神を本業の油絵に生かし、プレ・ラファエル派の画風から進んで、さらにアール・ヌーボー、アール・デコ風の近代芸術に近づいて行く。挿絵のイラスト芸術としての独立は間近だった。

しかしながら、小説出版の発展における挿絵の役割はすでに十分果し尽されたと見てよいだろう。世紀の終りには、読者層も固定し、百花燎乱の絵入り雑誌が競い合う中で、それに寄稿しつつ逆に敢えて挿絵を必要とせず言葉のイメージのみに頼ろうとする、Yeats の如き詩人と並んで Hardy ら新しい作家が登場しつつあったのである。

参 考 文 献

- John Carter & Graham Pollard, *An Enquiry into the Nature of Certain Nineteenth Century Pamphlets*. (London, 1934)
- Michael Sadleir, *XIX Century Fiction*. (London, 1951)
- Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties*. (London, 1956)
- Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind*. (London, 1957)
- John Gross, *The Rise and Fall of the Man of Letters*. (London, 1969)
- Ian Watt. *The Victorian Novel*. (New York, 1971)
- Lawrence Lerner (ed.), *The Victorians*. (London, 1978)
- 荒俣 宏, 『妖精画廊』 (月刊ペン社, 1980)

(7月1日受理)